

私たちのアイデンティティはタイトルや学位や証明書だと考えることはこの世の中の価値観では間違いない。パウロは自分の、使徒としてのアイデンティティは人から出ることや人間を通してではない。パウロの人間的なタイトルは少なくないと思う。使徒の働きを読むと、パウロの出身や、学歴、その時の社会的な地位と影響力はとても素晴らしい。使徒 9:1-2、彼が男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いていくまでの力を持っている。使徒 22:3、彼が受け入れた教育や、育った地について説明した。使徒 22:27-28、彼がローマ市民という有利なタイトルを持っている。ピリピ 3:5、彼が生まれてからの色々な良いタイトルがある。パウロは、人間的なタイトルがあるので信頼できることや、力や知識を持っているので頼られるとも思っていない。パウロの証明は父なる神とイエスキリストの中にある。

パウロの自分の使徒の証明は、二つの土台からだ。イエスキリストから、又、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神から、ということだ。

1) **イエスキリストから** イエスキリストは救い主であり、人間を罪から、又は暗闇のようなこの世界から救われる。今の時代は悪だらけの時代だ。テモテ第二 3:1-7 に、この世の悪について、詳しく載っている。神のご計画は私たち人間をこの今の悪の世界の力から、すなわち無慈悲、悲劇、誘惑、欺きに満ちた世界の力から、救い出す。イエスキリストは私たちを救うために、この暗闇の世界の中から救い出すために、十字架に掛かれ、苦しめられ、死に至りました。「ご自分を与えてくださいました」とは、ただの死より深い意味が含まれている。イエス様は私たち人間を救うため、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、僕の姿を取り、人間と同じようになられた。自分のことは見ないように、自分の権利を放棄する。イエス様は人としての姿をもって現れ、自らをひくくして、死に至るまで、それも十字架の死にまで従われた。イエス様は人という限界のある、様々な制限の中に生きる存在となられた。これは神の受肉のことを示している。

私たち人間のアイデンティティが、ご自分を与えてくださったイエス様の中にあるというのは、2つのことを示す。

一) **イエス様は私たちを愛している。**

イエス様は本当に深く愛しているので、自分を空しくして、私たちを何よりも大切にしている。それを考えると、私たちも自分自身を大切にしなければいけない。イエス様の私たちに対する深い愛は私たちの価値を現しているからだ。この世界の価値観では、私たちの価値は私たちに何ができるか、何を持っているか、どんな資格やどのくらいの財産をもっているか。イエス様の御前では、そうではない。イエス様が深い罪の中にいる私たちのために、死んでくださったことを通

して、私たちに価値が認められる。イエス様が罪を持つ私たちを無条件で赦し受け入れてくださるからこそ、イエス様の深い愛が表されていると共に、私たちに価値があるということも示している。ある教育者の分かち合い、「私の娘、もしある日お母さんが死んだら、覚えていてね、あなたが私を喜ばせなくても、あなたの試験が一番わるくても、あなたが悪いことをして牢に入れられても、私は最初からあなたを愛している。」人間の本当の価値がどこにあるのか。人間は自分に価値があるということを証明することで、認められ、愛されているのではない。人間は自分が元々弱くて足りない時、何も報いることや恩返しもできない時にも、価値が認められているのです。愛があるからこそ、私たちは価値ある存在なのです。

二) **自分の権利を放棄する自由がある。**現代世界の教えによると、人間は自分の権利をしっかりと握らないなら、暮らすことはできないくらいになると感じてしまう。罪は自己中心だ。自己中心は自分の権利だけに注目し、自分の欲望を満たすため、他のことやルールや情けにも関心を持っていない。自分を他の人のために与えるという考えは、一般の考えではない。イエス様の「ご自分を与えてくださった」姿をみると、私たちには、自分の権利を放棄する自由があることがわかる。人間は神の似姿で創造されているので、そういう選択の自由も与えられているはずだ。人間らしいとは権利を放棄する自由があるということ。確かに、人間は自己中心か、それとも、愛のために権利を放棄するか、そういう選択の自由を持っている。自己中心は自分の権利だけに注目する。愛はあえて自分の権利を放棄できる。選択してください。従うことは何かをしなければならぬということではない。自分の権利を放棄することを選ぶことです。愛があるので、従うという選択をするだけだ。クリスチャンになると、何かをしなければならぬとなるのではない。

2) **キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神から** ちょっと詳しくその文を分析すると、キリストをよみがえらせること、と、死者の中から、の2つの部分に分けられる。よみがえるとは希望があり、明るく喜びを持つというイメージだ。逆に、死者とは、希望がない、絶望的な暗闇というイメージだ。パウロは父なる神様が絶望から希望に変えられる御わざに基づいて、自分のアイデンティティを理解している。福音を受け入れ、イエス様を信じ始めてから、聖霊様が私たちの心の中に住んでいる。聖霊様を通して、私たちが父なる神様の力、その絶望から希望に変わる力を体験できる。よみがえりは人間が亡くなる時だけに関することではない。

イエス様の愛こそ私たちの価値を現し、父なる神様のよみがえる力こそ私たちの毎日の生活の中のすべてのことの希望なのです。祈ったり、聖書を読んだり、創造の神様と交わったりするのは、すべて、その愛と希望があるアイデンティティを確認するためなのです。祈り、聖書を読み、礼拝に出席することなどは義務ではない、アイデンティティを強化するための栄養素だ。